

# 絆

きずな

## 伊達市災害ボランティアセンター通信

第2号  
平成23年6月

社会福祉法人  
伊達市社会福祉協議会

伊達市保原町字宮下111-2  
Tel 024-576-4050 fax 024-574-3525  
E-Mail honsyo@dateshisyakyou.org

『東日本大震災』発生から約100日過ぎてもなお続く放射能問題や風評被害は、生活全般に不安を招いています。こんな時こそ、皆さん心をあわせともに乗り越えていきましょう。

とりもどそう 笑顔 ふやそう ありがとう！



相双地域避難所の方々から感謝のこいのぼり（霊山中央公民館）

伊達市内の災害ニーズは4月中で落ち着いたことから、5月以降ボランティアの新規受付を見合わせ、地元の登録者を中心に活動しています。また、6月から当市の災害ボランティアセンターは、通常のボランティアセンター業務に含まれた運営とさせていただきます。

今回の災害は、全国的に『ボランティアの存在』を、また新たな形として位置づけました。

どちらかといえば身近な地域での活動が主であるボランティア、テレビやインターネット等の情報を媒体として様々な年代へ、また専門職から一般の方まで広がりを見せました。特に、ゴールデンウィーク前後は伊達市出身の方から「ふるさとへ帰ってボランティアをしたい」という多くのお電話を受け、また逆に伊達市の方が他県で活動するために登録して向かう等、ボランティアが地域を越えて拡大し、全国的なネットワークや多くのつながりが生まれました。

### 「避難の場」から「生活の場」へ

災害ボランティアセンターでは、4月以降も避難所の方々とボランティアとのかかわりが継続されました。当初市内に設置された相双避難所は7ヶ所(伊達2・保原2・梁川2・霊山1)で1800人を超えていましたが、5月末には2ヶ所(伊達1・梁川1)で100人を割り込みました。

避難所には、南相馬市や浪江町の方々のご家族単位で生活されており、そこにひとつのコミュニティ(共同体・自治体)が生まれました。先の見通しがつかない中、「家へ戻りたいけれど、ここで自分達ができることをやりながら」という意識へ、そして家庭の大切な出来事でもある「出産」や「介護」の場面にも、ボランティアとの様々な出会いがありました。

# 避難所ボランティア / 活動状況

4月以降生活の場となった避難所は、地元ボランティアとのかかわりが増えました。各避難所では毎日市販のお弁当が支給されており、ボランティアの炊き出しは、家庭料理（具沢山味噌汁・煮物・野菜和え物）中心の献立で週1回差し入れされました。また「心のケア」で導入したマッサージや子ども達への読み聞かせも継続されました。

## 伊達地区



● 地元ボランティアによる「炊き出しボランティア」  
(3団体：延30名)



● 理美容組合による「床屋ボランティア」(伊達体育館)

## 梁川地区



● 地元ボランティアによる「炊き出しボランティア」  
(7団体：延100名)



● 避難所へ「割烹 萬よし」さんがお店の味を振舞いました  
(梁川体育館：約30回)

## 笑顔 ぐるっと元気に『だて』めぐり!!

避難所の方に思い出を作っていただくこと、社協で企画しました。5月9日(月)晴天の下梁川に滞在されている方9名が参加しました。当日11時に体育館を出発、まず地元の二野袋公園のふじ花を観賞、『つきだて花工房』へ向かいました。花工房では松花堂弁当をいただき、もりもり館や春の庭を散策しました。帰りは皆さんの要望で保原の旧亀岡邸(県重要文化財)を見学、建てつけや調度品などの説明にじっくり聞き入っていました。参加者からは「久しぶりに和室でゆっくり食事できてうれしい」「伊達市の養蚕やニット産業のことがよくわかった」などの声が聞かれました。久しぶりの外出を楽しみ、満足していただけたようです。



## 保原地区



●地元ボランティアによる「炊き出しボランティア」(柱沢公民館)



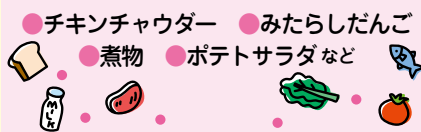
●「商工会青年部」の屋台村(焼そば・やきとり)

## 霊山地区



●毎週水曜日に地元ボランティアと企業で「炊き出しボランティア」(8団体：約65名)

### 夕食にそえられたメニュー



●「自衛隊福島駐屯地」楽団の演奏会&歌謡ショー(霊山中央公民館:隊員約10名)

## ありがとう ベビーベッド&チャイルドシート

ボランティアセンターですべての要望を叶えることは難しいのですが、双方の想いがマッチングできたエピソードがありました。

南相馬市から霊山公民館に避難されていた方に、待望の次男が誕生しました。お母さんにとっては2人目のお子さんでしたが、避難所での子育ては大変だということもあり、霊山の子育て経験者に、沐浴や授乳等の「育児ボランティア」としてかかわっていただきました。また、赤ちゃんを動きが活発な1歳5ヶ月の長男と一緒に寝かせておくのは心配だということでお母さんからベビーベッドの希望があり、インターネットで『mama to mama』(ママ・トゥ・ママ)の子育て用具提供の情報を得て、ベビーベッドとベビー布団の譲り受けが実現しました。現在は地元に戻られましたが、引越してから大事に使われているそうです。

その後も別のお母さんからの要望で、赤ちゃんと移動する際のチャイルドシートがほしいというお話がありました。再度連絡をとったところ車に合うチャイルドシートが見つかり、すぐに送っていただいたので、避難所からの2次移動に利用することができました。



## 避難所物資

- 避難所の対象者とニーズに合わせ、皆さんに届けられました



コインランドリーにっこり / メッセージ添え利用券 300 枚 避難所の子供達へノートや学用品を届けました (南相馬市出身: 堀田 寿男様)  
(霊山町: 金澤 久子様)

## 物資仕分けボランティア

- 県から依頼があった「靴仕分けボランティア」は、梁川町の新田倉庫にて2日間行われました  
(1 回目: 梁川の地元ボランティア 13 名、2 回目: 聖光学院高等学校野球部 1 年生 27 名が大活躍)



## 表敬訪問



4/21 北九州福岡県の「大牟田市社会福祉協議会」おおとせいご 大戸誠興事務局長が遠路来訪され『心』を届けていただきました。大牟田市と旧月舘町は姉妹都市でした。大戸局長は今回支援調査として仙台方面へ向う前にわざわざ立ち寄ってくださいました。

## ～つなごう手と手～ 編集後記

「市民」であり「県民」であり「国民」である自分。今回の震災を経て、様々な視点から自分を見つめる機会を得ることができました。家族と過ごす自分、原発問題が身近に影響している「フクシマ」、この問題を国の政治はどの方向に導こうとしているのか、そして世界でも注目されている日本です。

つい先日、ある教授が「この規模の震災は今年2月の専門学会で予測されていたが、危機管理が反映されなかった」と述べていました。「天災」をタイミングよく防げるほど科学は進歩しているとは思えず、こうすべきだったという「人災」におきかえられてしまうのも情報過多の影響でしょうか。

「誰かのために自分ができること＝ボランティアの力」が注目されたように、心の復興を大切に一步步進みたいと思います。タイトル『絆』は、2月の社協講演会で鎌田 實先生が残してくれた言葉。被災地の人達ともつながりながら、少しずつお互いの「笑顔」と「ありがとう」を増やしていきましょう。